

卯は山瀬辰だし巳うち午くだり未わかさに申ひかた風

西真西戌はしも西亥たば風北は真丑あひ寅は中の手

〔古事記〕下徳天皇上幸之時、黒日賣獻御歌曰、夜麻登幣邇爾斯布岐阿宜氏玖毛婆那禮會岐袁理登母和禮和須禮米夜

〔古事記傳 三十五〕爾斯布岐阿宜氏は、西風吹令散而なり、西風を爾斯とのみ云は、風と云ことを

あらず、此御代のころ、さまで、此歌に依て考るに、比牟加斯爾斯と云は、もと其方より吹風の名

にて、比牟加斯は東風、爾斯は西風のことなりしが、轉て其吹方の名とはなれるなるべし、故方

をば多く、東西とのみほいはず、東方西方といへり、是西風の吹來る方、東風の吹來る方と云意

より云なれたることなるべし、然るを後に、方りの名を本として思ふ故に、西風を爾斯との云み

聞ゆるは、風を略ける如し、斯は風にて、風神を志那都比古と申す志、又嵐颯などの志も同じ、風は神

冠辭、考志長鳥條に云れたるが如し、又暴風東風などの知も通音にて同きなるべし、さて東風

西風と云名の意は、比牟加斯は日向風なり、凡て東方を日向、爾斯は詳ならねど、試に云は、和風

ならむか、那岐は爾と切る、又和とは天の霽たるを云、常には風のみならず、雨又雲霧などよめなく

晴たるをいむ、古今集戀歌に、雲もなく、晴たる朝の我なり、風いなきては、此歌に用なし、凡て

甚晴といはむ、料に、和たる朝と云り、是晴を和と云故なり、風いなきては、此歌に用なし、凡て

那具とは、何にまれ、静まり收まるを云へ、西風は殊によく雲霧を吹晴らす物なれば、和風と云

るか、さては次の句の雲ばなれにも、殊に由あり、さて比牟加斯爾斯をもと、風名とするにつ

より考得ず、万葉十八丁に、南吹雪消益而射水河、これも南風を美那美とのみよめり、是は

歌に、西風を爾斯とのみあるを、風を略きたるものなり、若常に然云こと、美那美とは、美那

美と云も、たと、伎多にも、此に准へて定むべし、

〔萬葉集 雜歌〕 羈旅作

天霧相日方吹羅之水、莖之崗水門爾波立渡